考える授業やるキット｜社会

見えないものが見えてくる「考える授業やるキット」活用のススメ

仙台市立錦ケ丘小学校　校長　菅原弘一

・学習指導要領の趣旨の実現に向け「社会的な見方・考え方」を働かせ、「考える」ことを大切にした社会科の授業づくりが求められる
・「考える」ことを通して、知っているようで知らなかったこと、見ているようで見ていなかったものが見えてくることが、社会科の授業のおもしろさ
・見えていなかったものについて「考える」ことができるようにするために、映像教材や思考ツールを核とした教材群「考える授業やるキット」の活用がオススメ！

1．“覚える”社会科から“考える”社会科へ

教員を志す大学生に、社会科の授業について尋ねると、かなりの確率で「覚えるのが苦手だったから嫌い」という答えが返ってきます。
大学生に限らず、「社会科は覚える教科」と思っている人は多いのではないでしょうか。
実際、社会科の教科書にはたくさんの用語が登場し、これらを全て覚えなければならないと思うと、つらい気持ちになります。

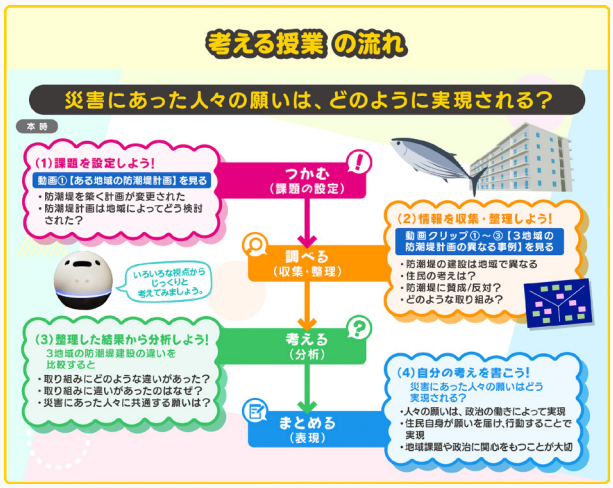
また、社会科では「調べる活動や調べたことを発表する活動が多かった」という答えも返ってきます。
課題を解決するために根拠となる資料を調べることは、社会科の基本中の基本として大事なことです。
でも、子どもたちの「調べる」活動が、資料を書き写して終わりになっていることはないでしょうか。
発表が、書き写したことをそのまま伝えることになっていないでしょうか。

社会科で大切にしたいのは、調べた結果をもとに、社会の出来事について１人１人が自分なりに「考える」過程です。
「考える」活動の充実がなければ、学習指導要領に記された社会科の目標に迫ることはできないでしょう。

「考える授業やるキット」は、「覚える」から「考える」、「調べる」から「調べたことをもとに考える」社会科へと授業を転換し、社会科の教科目標に迫る授業をサポートする教材キットです。

このため、「やるキット」では、問題解決的な学習の過程を、つかむ（課題の設定）→調べる（収集・整理）→考える（分析）→まとめる（表現）としています。

探究的な学習の過程で、「整理」と「分析」は「整理・分析」とひとまとめにするのが一般的だと思いますが、敢えて「考える（分析）」という段階を明確に位置付けることで、「考える」ことを大切にする授業であることが際立つようにしています。



2．「考える授業やるキット」って何？

社会科に限らず、「考えることが大切だ」ということは、だれもが思うことでしょう。
ただし、そこには「（知的な）おもしろさ」がないと、考えてみたいとも思わないだろうし、考えてみてよかったと思えることも少ないのではないでしょうか。

では、社会科で「考える」ことが、「知的におもしろい」と思えるのは、どんなときでしょう。

例えば、東日本大震災があって、海岸に新たに巨大な防潮堤がつくられたという社会的な出来事は、実際に目に見える事実です。
その事実自体が、興味深い出来事ではありますが、それを知っただけなら、目に見えた事実を確認したに過ぎません。
防潮堤の建設には、震災からの復旧・復興を支える、目には見えない社会の仕組みがあり、立場によって異なる様々な人々の思いや願いがあります。
さらに、防潮堤をつくるという同じ行為が、地域の違いによって、全く異なる形で表れるのです。

なぜ、そうした違いがあるのか、調べたことについて、時間に着目して取り組みの経過を整理したり、空間に着目して地域間の違いを整理したり、人に着目して共通する思いや願いを整理したりしていくと、段々と社会の仕組みや背景など、これまで見えていなかったものが見えるようになってきます。
その結果、１つの社会的な出来事が思ってもいなかった他の出来事とつながって見えてくることもあるし、自分自身の社会への関わり方が見えてくることもあるのです。

このように、社会の様々な出来事について、学習指導要領社会編に示されているような「社会的な見方･考え方」を働かせ、「空間」「時間」「人」に着目しながら「考える」ことを通して、知っているようで知らなかったこと、見ているようで見ていなかったものが見えてくることに、社会科を学ぶおもしろさを感じてほしいと思っています。

しかし、「社会的な見方･考え方」を働かせるといっても、そもそも見えていなかったものについて「考える」ことができるようにするためには、見えないものを見えるようにするための工夫が必要になります。
そこで、力を発揮するのが、「やるキット」の教材群なのです。

３．「考える」社会科を支える豊富な映像コンテンツ

１人１台端末の整備が進み、NHK for School のコンテンツを利用する機会は、どの学校でも格段に増えていると思います。
「やるキット」の根幹をなしているのは、番組、動画クリップ、番組の静止画像など、ＮＨＫならではの良質な映像コンテンツです。

番組や動画クリップは、情報量が豊富で、普段見ることのできない映像やＣＧでの再現映像なども織り交ぜながら、社会の出来事の「見えない」部分についても、わかりやすく解説されています。
子どもたちが興味をもって見ることは間違いありません。
しかし、わかりやすい映像だからこそ、「わかったつもり」になって終わってしまうことも多いものです。

また、番組と動画クリップとでは、視聴によって得られる効果が異なります。
映像コンテンツを生かして、子どもたちが自ら課題を追究し、話し合いを通して考えを深めていくことができるような授業をつくるポイントを以下に示します。

（１）学習課題を設定するための番組視聴

追究したい課題、考えてみたい課題は、突然生まれるものではありません。
これから学習する内容についてイメージを共有したり、「ふしぎだな」と思えるような社会的事象の見方や考え方を示してあげたりする必要があります。
番組を利用することで、１０分間という短い時間で興味・関心を高め、疑問をふくらませることができます。
番組は、これから学習する課題を把握できるようにするために最適な教材なのです。
授業（単元）の冒頭で視聴させるのは、番組利用の効果を高める１つの形と言えます。

ただし、子どもたちの実態なども考慮しながら、より思考を活性化させるためには、番組の一部だけを見せる方が効果的だと考えられる場合もあります。

そのような場合「やるキット」に用意されている番組は、利用したい部分のみが視聴できるように動画の再生開始位置と再生終了位置の指定をしています。

そうした細かい配慮をした上で、キットの部品となる教材を用意しているのも「やるキット」のよさです。

「番組」のよさを生かしたい場合は、子どもたちの「視聴能力」を高めていくことも大切です。
番組から疑問を引き出すために、視聴して「気付いたこと」「わかったこと」「疑問に思ったこと」などを書き出したり、話し合ったりする活動を毎回同じように、継続的におこなうことをお奨めします。
番組を見る着眼点に気付いたり、自分とは異なる視点と出会ったりしながら、「視聴能力」を高めていくことができます。

（2）多面的・多角的に情報を収集・整理するための動画クリップ活用

追究したい課題について考えを深めるためには、１つのテーマに多面的・多角的に迫ることができるような資料の充実が欠かせません。
そこで役に立つのが番組に関連する豊富な動画クリップの存在です。

例えば、震災からの復旧・復興を考える番組、社会にドキリ『震災からの復旧・復興』では、宮城県気仙沼市大谷地区の防潮堤に対する考えが描かれます。
この番組を見ただけでは、対象となった大谷地区の事例から、復興に向けた住民の願いについて考えることになります。
実際には、防潮堤に対する考えは、地域によって異なっており、そこに気付かせたいと思えば、他地域の事例を探さなければなりません。

NHK for School の豊富な動画クリップの中には、大谷地区とは異なる考えで防潮堤と向き合った、宮城県女川町や岩手県宮古市田老地区の事例もあります。
大谷地区を取り上げた動画クリップも含め、この３本の動画クリップは、防潮堤という同じテーマで、異なる地域の様子を比較することを前提につくられています。
３本を比較しながら視聴することで、違いがよくわかるので、子どもたちの話し合いを活性化させ、考えを整理することに役立ちます。

同じテーマでも、見方や考え方が異なる動画クリップの提示は、様々な社会の課題がどのように解決されていくとよいのか、これからの社会がどのようになっていくとよいのかといった、正解のない課題の解決を表面的なもので終わらせず、深く考えさせる場合に効果的です。

NHK for School のサイト内には非常に多くの動画クリップがあり、選択に迷うこともあります。
どのようなクリップを選んで視聴すると子どもたちの思考が促されるのか、キットに用意された動画クリップを参考にしてほしいと思います。
子どもたちが自分の考えを整理したり、理解を確かにしたりしたいとき、充実した動画クリップ群がその助けとなるはずです。

（3）どうして番組の「静止画集」が用意されているのか

「やるキット」には、番組や動画クリップのシーンを静止画像として切り出した「静止画集」が用意されています。
静止画をどのように利用するのか、その方法は様々に考えることができます。

「静止画集」を用意した理由の１つとして、番組や動画クリップを資料として調べる活動の課題への対応が挙げられます。
映像を視聴して調べる子どもたちの様子を見ていると、テロップを書き写したり、ナレーションを聞き取ってそのまま書いたりしている子が多いことに気付きます。
書くことに一生懸命になるあまり、大切なシーンを見逃していたり、映像から感じてほしいことを感じ取らずにいたりするのです。

また、映像を視聴した上で、気付きなどを文字で書き表すことに要する時間の問題もあります。
１人１台端末が整備され、自分のペースで動画を一時停止して見たり、何度も繰り返し見たりすることができるようになる分、時間もかかるのです。

そうした課題の解決に役立てようと用意されたのが、静止画集です。
番組中のキーとなるシーンを予め用意しておくことで、詳細に書き取らなくても、静止画像を手がかりに番組や動画クリップの内容に立ち返ることができます。
静止画を選択することが、メモを取る代わりになるというわけです。

ただし、大切にしたいのは、静止画を選択したら、それを選択した理由を説明できるようにすることです。
１人１台端末の活用が進み、操作スキルが上がってくれば、自分で必要なシーンをキャプチャして、メモ代わりにしたり、自分の考えの説明に用いたりすることもできるようになっていくでしょう。

テキストではなく、映像を資料として活用するのですから、映像として訴えかけている情報に着目しながら考えを深めてほしいと思います。

４．調べて終わりにしない、「深く」考えるための思考ツールの活用

様々な教科などで、思考ツールを活用した授業実践を目にする機会があると思います。
社会の出来事について考えるとき、学習指導要領が示す「社会的な見方・考え方」という観点からも、収集した情報を「比較する」「関連付ける」といった思考スキルを働かせながら整理し、分析につなげていくことが大切です。
調べる過程で獲得された様々な情報が関連付けられ、構造化されていったときに、単に「調べた」ではなく、調べたことを通して「深く考えた」と言えるからです。

このため、「やるキット」で提案している授業プランは、課題に対する自分の考えをまとめるにあたって、思考ツールを使って「頭の中」にある情報を可視化し、共有しながら整理することを前提としています。

社会科の授業において、思考ツールを効果的に使うために、以下の点に留意するとよいでしょう。

（１）働かせたい思考スキルと使いたい思考ツールは合っているか？

思考ツールには、どのように頭を働かせたいかという「思考スキル」との対応関係があります。

社会科の見方・考え方として大切な「関連付ける」であれば、コンセプトマップやクラゲチャートを使用することで、その思考を促すことができるのです。

ただし、同じ思考スキルに対して、複数の思考ツールが対応していたり、同じ思考ツールに対して、複数の思考スキルが対応したりしていて、思考スキルを用いる場面や用い方は、一様ではありません。

初等中等教育におけるシンキングツールの活用
黒上晴夫　情報の科学と技術 67 巻 10 号 (2017)

表２　思考スキルとシンキングツールの対応

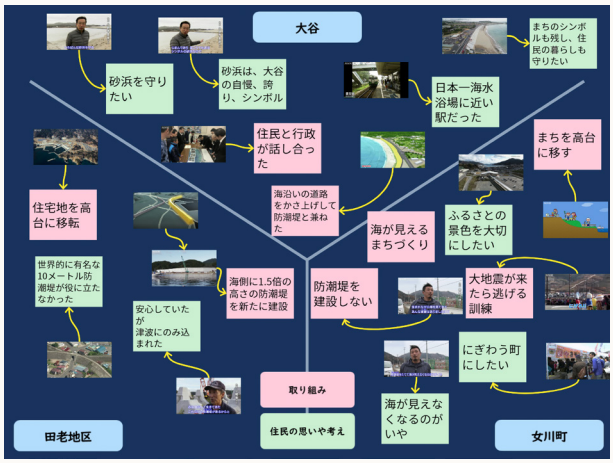
思考スキル	シンキングツール	思考スキルと対応した活用法
順序付ける	ステップ・チャート	・事項の順序を検討する
比較する	ベン図 マトリクス	・共通点と相違点を明らかにする ・視点を設定して特徴を記述する
分類する	ベン図 くま手チャート	・円が表す特徴に当てはまるものを列挙する ・櫛に設定された視点にあてはまるものを列挙する
関連付ける	コンセプトマップ クラゲ・チャート	・事項同士の関係を記述する ・頭部においた事項とその原因をつなげる
多面的にみる	くま手チャート Y／X／Wチャート フィッシュボーン	・櫛に設定された視点から対象をみる ・領域に設定された視点から対象をみる ・中骨に設定された要因を細分化して，問題解決を図る
変換する	イメージマップ Y／X／Wチャート	・広げたイメージをもとに言い換える ・領域の視点から対象をみて，新しい意味を構成する
広げる	イメージマップ Y／X／Wチャート	・中心の語からイメージをつくり出す ・領域の視点にそって出したアイデアからイメージをつくる
理由付ける	クラゲ・チャート キャンディ・チャート ピラミッド・チャート	・頭部においた主張に論拠をつなげる ・条件から予想した結果の根拠を書き出す ・頂点においた主張に理由と根拠をつなげる
見通す	キャンディ・チャート	・条件から結果を予想する
具体化する	ピラミッド・チャート	・頂点においた主張や概念に対応する下位概念や事実をあげる
抽象化する	ピラミッド・チャート	・低層部においた事実の上位概念をもとに，主張をつくる
構造化する	ステップ・チャート クラゲ・チャート ピラミッド・チャート コンセプトマップ	・情報の順序を検討する ・主張と論拠の関係を整理する ・事実と上位概念の関係，根拠と理由と主張の関係を整理する ・対象同士の相互関係を明らかに刷る
分析する	くま手チャート	・複雑な対象を細分化する
価値付ける	PMI	・対象のプラス面，マイナス面，気になるところを明らかにする
メタ認知する	KWL	・既有知識をもとに，調査事項を決めて，わかったことを整理する

「やるキット」では、思考スキルと思考ツールのミスマッチが起こらないよう、この授業で働かせたい思考スキルは何かを吟味し、求めたい思考活動を具体的に検討しながら、使用する思考ツールを選択し、提案しています。
もちろん、提案通りの使い方でなくともよいのですが、思考ツールの活用に慣れていなければ、思考スキルと思考ツールの関係を理解して、適切なツールを使うための参考としてください。

（2）思考ツールを利用する目的を忘れていないか？

思考ツールを利用するのは、答えを見つけたい問いや解決したい課題があるからです。
思考ツールは、考えを整理するためのメモ用紙であり、考えた結果を表現する解答用紙ではありません。
思考ツールの枠に沿って、情報を埋めることが目的（ゴール）ではないのです。

例えば、社会にドキリ『震災からの復旧・復興』の回では、宮城県気仙沼市大谷地区、宮城県女川町、岩手県宮古市田老地区、３つの異なる地域の防潮堤に対する考えを整理する活動を提案しています。



地域毎に収集した情報を整理する段階では、地域間の異同を確認したいので「比較する」という思考スキルを働かせることを念頭に、Ｙチャートを選択しています。
Ｙチャートに気付きを記していくと、目的を達成したような気分になるのですが、そこがゴールではありません。

最終的に考えたいことは、「災害にあった人々の願いは、どのように実現されるのだろう？」ということなので、そういった視点でＹチャートに並べた情報を改めて俯瞰する必要があります。

このため、「やるキット」では、Ｙチャートに並べた情報の質の違いや共通点がわかりやすくなるように、実際の取り組み（事実）と住民の思いや考えを色で区別して配置することを提案するなど、「思考ツール」の活用の仕方も提案しています。

まずは、色の区別を意識せず、発散的に思いつくことを書けるだけ書いてみて、改めて、事実と思いを区別し直してみるのもよいでしょう。
静止画集を利用すれば、時間の短縮を図ることもできます。
また、似たことが書かれたカードや関連するカードを近くに置いたり、まとめて見出しをつけてみたりするのもよいでしょう。
そうやって、いったん並べたカードを整理し直していく過程で対話が促進され、「災害にあった人々の願いは、どのように実現されていくのか」という課題について、何が言えるのかが見えてくるのだと思います。

思考ツールを用いれば、課題の解決のために働かせたい思考スキルが何なのかを明示的に示すことができます。
しかし、思考ツールを使うこと自体が目的ではないので、子どもの実態や授業のねらいによっては、思考ツールの利用にとらわれ過ぎないということも頭の片隅に置いておきましょう。

５.ＧＩＧＡスクール環境を生かして子ども自身が「学びとる」学習へ

NHK for School では、これまでも番組ごとに「番組利用案」や「ワークシート」を提供してきました。
では、今回の「やるキット」は、これまでと何が違うのでしょう。
それは、ＧＩＧＡスクールで整備された１人１台端末を用いたクラウド環境での使用を前提としていることです。
このため、「やるキット」で提供しているのは、「考える」ことを大切にした社会科の授業づくりのためのデジタル化された教材「キット」だということです。

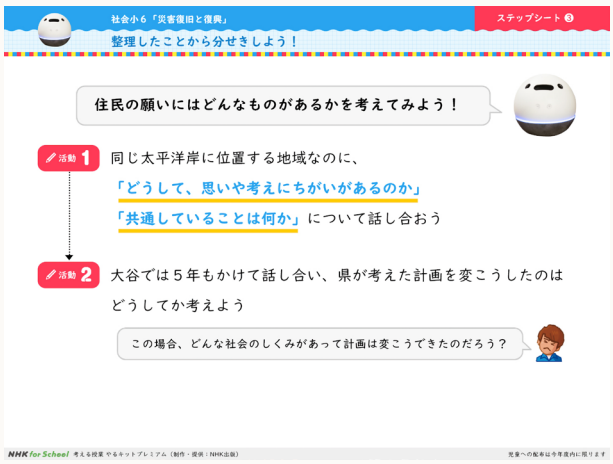
「キット」という呼び方からもわかるように、そこに用意されているものは、考える授業を組み立てるための材料一式です。
それを組み立てて、授業をつくるのは、あくまでも、「キット」を利用する先生ということになります。
番組の放送回ごとに、提案されている授業プランは、あくまでも１つの提案に過ぎません。
目の前の子どもたちの実態や先生の経験の度合いによって、自由にアレンジしてかまわないのです。

さらに大事なことは、「やるキット」は、端末の日常的な持ち帰りを念頭に、先生が「教える」授業から、子ども自身が「学びとる」ための学習指導への移行も見据えていると言うことです。

「キット」の中に含まれる「ステップシート」がそのことをよく表しています。「ステップシート」は、文字通り、学び方のステップ（手順）を示しているものです。
どのような活動をおこなうのかという指示のほか、どんなことに留意しながら考えればよいのか、考えるヒントも示されています。

先生がこのシートを提示しながら授業を進めることもできますが、学習の自己管理ができる授業支援ツールなどを用いて、予め子どもたちに示しておくこともできます。

ステップシートがあることで、学習の見通しをもつことができ、学校の授業以外の時間も使いながら、主体的に学び進めることができるようになります。



考える社会科を目指せば目指すほど、個人で調べる活動を充実させることと皆で考えを深めることを両立させるための「時間の壁」に突き当たります。
壁を乗り越えるためには、学校の授業と家庭での学習の連携や往還も必要になってくるのです。
そして、それを実現するためには、授業設計の工夫はもちろん、子ども自身がどの程度学び方を獲得できているかが課題となります。

先生と一緒に「やるキット」で学ぶ経験を重ねることは、「社会的な見方・考え方」を大切にした「学習の仕方」を学ぶことにもなります。
学校での授業でも家庭での学習でも、子ども自身が自らの「課題」を意識し、社会の出来事について「もっと調べたい」「もっと考えてみたい」という気持ちを持続できる、そんな魅力的な社会科の学びが広がってほしいと願っています。